1日も休まなかった神戸新聞

幸田　阪神・淡路大震災があったのは、ちょうど私が作家としてデビューした年でもあり、個人的にも忘れられない出来事です。当時関西にいた友人が、地震の朝、何が何でもと無理して出社したのですが、それよりもなぜ瓦礫の下の人を救わなかったのかと、いまだに悔やんでいます。

上羽　よく分かります。あの激震で多くの記者たちも飛び起き、簡単な着替えとカメラ、メモ帳を持って現場へと飛び出しました。家族を避難させてから出社する者、身重の妻を実家に預けてから出社する者。ある一人暮らしの女性記者は預金通帳とカメラと着替えだけを鞄に入れ外に出た、とにかく不安で一刻も早くここを離れたいという気持ちだったようです。しかしバスも電車もダメでなかなか社へたどり着けない、自転車やバイクで来た者もいました。身震いをするほどの現場、家が傾いたり倒れたり、あちこちで火事です。みんなケガ人を救いだそうと必死で、残った病院でも医師と看護師が懸命に負傷者の手当てをしていました。避難所は被災者で溢れ、若いカメラマンは写真を撮ることにどんな意味があるか悩んだといいます。"あんたらマスコミやったら救急車呼んでくれ、無線持ってんのやろ。"傷ついた子供を抱いた母子を撮ろうとしたら"人間だったら撮らないで。"と言われた。新聞記者としての職業意識と人間の感情のはざまでの葛藤でした。社に戻って、"報道とは何ですか、写真を撮るとはどういうことですか。"と泣きながらデスクに詰め寄った記者もいました。幸田さんのお友達の気持ちがよく分かります。

幸田　数年後の事ですが、テロ小説を書くためホテルにカンヅメになっている最中に9・11[※1]の事件が起きました。そのとき作家としてテロの小説を書くことにどんな意味があるのか悩み、一時小説が書けなくなったんです。同じ感覚ですね。自分の仕事への使命感と災害の真っただ中でどう救済の手をさしだすか、苦しい葛藤です。

上羽　当時論説委員室でも議論しました。この悲惨を広く伝えるのが私たちの役割だが、一方でヒューマニズムを喚起するメディアの倫理観は、結局は自己満足にすぎないではないか。いや少なくとも被災者への思いや葛藤を全然持たずにシャッターを押すのと、思いを持って押すのとは全く違うのではないか、という議論です。

震災当日の神戸新聞夕刊

「生存者がいる！」住民が協力しての救助活動が続けられた。

市内の鉄道も寸断された。傾いた高架線路と車輌。（阪神電鉄本線）

写真3点提供：神戸新聞社

幸田　地震直後、復旧活動を見越してゼネコン株などが値上がりしたんです。大惨禍を金儲けの種にする人達に、金融市場の仲間達はとても憤慨していました。それにしてもよく当日の夕刊から出されましたね。

上羽　新聞社で制作の中心となる建物はつぶれましたが、たまたま1年前に京都新聞と緊急事態時の援助協定を結んでいて、京都に単車で走り、版と版の間の限られた時間を使わせてもらって制作できたのです。幸い印刷工場は無事で新聞の発行は続けられました。その頃の様子が『神戸新聞の100日』として角川ソフィア文庫から出版されました。またフジテレビ系列で「嵐」の櫻井翔さん主演のドキュメンタリードラマ『神戸新聞の7日間』も放映されます。（2010年1月16日放映済）

幸田　発行出来ても配達する人はいないし、読者も被災されていて、それどころではないのでは？

上羽　そうです。販売店は被災し、読者もそこにいない。避難所で配ったり、大渋滞の車の人に一部一部渡していったのです。喜ばれ励まされました。地方新聞は読者と運命共同体なんだという、同じ被災者としての共感ですね。

幸田　みんな仲間というか連帯感ですね。読者も励まされたでしょうね。

上羽　読者の手紙でデスクは一日三涙と書きました。"薄い新聞でも瓦礫の中でつくられた新聞を大事にしている、頑張れ。"といった手紙が来るたび涙しました。その時の論説委員長は記者たちの人間の幅が広がったと書いています。その後、他の地方紙やブロック紙の間で協定が結ばれるようになりました。

動きだした復興への道

幸田　世界を驚かせた大災害でしたが、ただちに復興へ立ち上がりましたね。

上羽　1週間ほど前、私は須磨から長田まで歩いてみました。15年経って区画整理事業もあと1カ所を残すだけです。まだ、更地はあちこち残っていますが、通学路や病院への道などに歩行者空間がたっぷり取ってあったり、小さな公園も増えていましたね。

幸田　災害の経験によって住宅密集地も注目され、都市計画の必要性が広く認められたということでしょうか。

上羽　とにかく緑と花が増えました。災禍の中で1輪のスイセンが咲いていたと読者の手紙にあり、そのあと「瓦礫に花を植えましょう。」という市民運動が起こったのです。それを神戸市がバックアップし、現在市内に約100カ所の市民花壇が出来ています。

幸田　小説で終戦直後の銀座を書いたことがありますが、大空襲で焼け野原の銀座で柳が芽を吹いたのを見て心が安らいだと聞きました。緑の生命力は人間を元気づけますね。

幸田　真音
こうだ　まいん
作家
1951年生まれ。米国系銀行などを経て、95年作家に。タイムリーな経済トピックスをテーマに次々と作品を刊行し、多くの企業人・財界人からも圧倒的な支持を得ている。著書は『日本国債』『白銀券』『あさんと　絹屋半兵衛』『バイアウト』など多数。最近著は『舶来屋』（新潮社）。テレビやラジオでも活躍。政府税制調査会、財政制度等審議会などの公職も務める。

上羽　人間がつくったものは脆いのです。震災の火事でも焼けどまったのは太い木のあるところで、翌年新芽が吹き出しました。私たちは戦後、大地に根を張った生き方をしてこなかったのではないか、と木に教えられた気がしました。兵庫県では市街地や山の緑を復活させようと県民緑税が創設され、神戸や阪神間に緑が増えました。

幸田　住宅の復興も大変でしたね。

上羽　44万世帯が家をなくし、6400人を超える方々が亡くなりました。最初は学校や公的施設が避難所で、凍てつく寒さのなか暖房がなく、風邪で亡くなる方もありました。一刻も早くと仮設住宅が4330戸建設されたのです。問題は用地で、神戸市内や阪神間だけでは確保できず、加古川や大阪、姫路にもつくりました。住都公団（現UR都市機構）の用地もずいぶん活用されました。その後の2年間で恒久住宅が12万戸余り、うち公的住宅が65000戸、その2割強が住都公団の建設でした。すぐにでも仮設住宅から恒久住宅へ移動してもらいたいところですが、高齢社会の住宅はよく考え、丁寧につくるべきで、どうしても時間がかかる。県も市も住都公団も苦労されたと思います。また場所も問題でした。都心から離れるし、災害前の住まいからも離れるからです。

幸田　災害前に居た場所から離れて住むのは辛いですよね。

上羽　代表的な復興住宅がHAT[※2]神戸で、神戸製鋼所と川崎製鉄の工場跡地です。県と市、住都公団で再開発を進め、民間とも協働して建設されました。

幸田　災害は起きるものという前提でまちづくりをしなければと思うのですが、この震災で住都公団はノウハウを蓄積し、その後に活かされているのでしょうね。

上羽　新潟県中越沖地震では大いに活かされていると聞いています。阪神・淡路大震災のときは住都公団保有の土地も人材も多かったようです。神戸新聞が新しい社屋を構えたのが

※1 9・11の事件
2001年9月11日、米国で起きた同時多発テロ事件。4機の航空機がハイジャックされ、ワールドトレードセンターやペンタゴンへ突入した。

※2 HAT
Happy Active Townの意